

TPN に対する反応—栄養アセスメントの1つの方法として—

The response to TPN—A form of nutritional assessment: *Starker PM, Lasala PA, et al* (Ann Surg 198; 720-724, 1983)

外科患者の栄養状態と術後の合併症および死亡における関係はよく知られている。1週間以上の術前 TPN は、術後合併症を減少させることは他の研究者によって報告されている。しかし、TPN の恩恵によって術後の合併症や死亡が減少したと言っても、なおかなりの患者は術後合併症を経験する。

著者らは下記の条件を満足する32人の患者を対象に、術前栄養補給の役割をより明確にすることと、栄養補給に対する反応からみた手術の時期の選択について検討した。

対象患者の条件: ①栄養不良状態(最近における通常体重の10%以上

の減少および血清アルブミン3.5g/dl以下)である。②5~14日間の術前栄養補給がされる。③大手術が施行される。術前栄養補給に対する反応から、グループ1(反応群: 体重減少と血清アルブミンの上昇)とグループ2(無反応群: 体重増加と血清アルブミンの不変あるいは低下)に分けた。両グループ間では年齢、性、体重減少率、血清アルブミン値、TPN 施行期間および手術時間において有意の差は認められていない。両グループ間で際立って異なっていたことは術後合併症の発生頻度であった。グループ1では1例のみであったのに対して、グループ2では16例中8例、半数において15件の合併症が発生した。4人の患者では24時間以上、人工呼吸器の使用が必要であった一方、6人の患者で8件の感染症が発生し、そのうち肺炎を起こした2人では、長期にわたる術後の人工呼吸器使用が必要で、

うち1人は呼吸不全のため死亡した。

栄養不良時に特徴的な身体構成の変化は、細胞外液の増加である。結果的に生ずる浮腫は創傷治癒遅延、縫合不全などに関係し、術後の間質性の肺浮腫、呼吸不全も生ずる。したがって、浮腫の消退、体重減少と共にアルブミン値の上昇したグループ1は術後合併症が少なかった。これは TPN に反応し、栄養状態が改善、感染防御に役立つ免疫力が増強したためと考えられる。一方、TPN によって血清アルブミンの減少と共に、むしろ体重増加のみられたグループ2では術後合併症の危険が高い。著者らは今後は TPN に反応しなかったグループ2では TPN の施行期間を延長し、手術の時期を遅らせたほうが良いかもしれないと指摘し、更に検討すると述べている。

(愛知県がんセンター第1内科

松浦 昭 抄)

Coffee Break

なぜウサギは○羽と数えるのか

この“Coffee Break”の原稿、書け書けと、編集部につつかれる。そのたびに、“よし引き受けた”とは言うものの、この欄に適当なテーマが、そう転がっているわけではない。しかし、編集委員をしていると、何度かの督目に1度ぐらいいは答えないと、工合が悪くなる。こちらの雑学の加減も、たかが知れているとも思われよう。

そこで、ウサギはなぜ○羽と数えるか、について雑文をものにしよう。と言ってもまったく受け売りである。異説があったり、真説があったら、御教示頂きたい。

ネタを、最初に明かしておくと、「創造の世界」という季刊雑誌で、1984年 No. 51 である。そうは売れない雑誌らしいから、信山社とか、三省堂などではまだ手に入るはずである。この雑誌に、“シンポジウム日本の狩猟文化”という座談会記事がある。メンバーは、梅原 猛、河合雅雄、作田啓一、佐々木高明、千葉徳爾という錚々たる大家である。だから、記事が本当だと言うのではない。文中、“肉食の許される範囲”という小項で、民俗学の千葉教授は“日本でも四つ足と称しているのは実際には、ウシ、ウマだったようで

すよ。野獣類は食ったってかまわない。ウサギは鳥に準ずるということですね”と発言し、これを受けて、動物生態学の河合教授は“ウサギは数えるときに1羽、2羽というでしょう。あれは二説あって、1つは、ウサギ肉は淡白で鳥肉みたいなんです。だから食べてもいいという説と、殺生禁断の令が出て、やはり獣肉は食いたいから、ウサギをウとサギに分けて(笑)、あれは鳥仲間なんだと、それもいちばん捕りやすく、たくさんおりますし。それでウサギだけは食っておったという話があるのです”と答えている。更に、千葉は“あれもどういうわけだかいろんな説があって、よくわからないのですが……”とある。あれもとあるのは、よくわからないけれども、なぜウサギを○羽と数えることらしい。

いつか、学会予行で、動物実験成績を報告したものがいて、“家兎○羽を用い……”とやっていたので、“なぜ家兎は○羽と数えるのか”質問したことがある。その後、ずっと気になっていたら、上記の記事にぶつかったわけである。

(山口大学第1内科 竹本 忠良)